

浮村

田車助

あけのさき
暁州

第四編

揚海周延重

高解書様

本所
起泉
院





文庫11
A497
4

48-2189

沢村田之助

曙草紙

四編上之巻

寫祥堂板

芥川春清園
岡本起泉綴
揚州周延画



岡本起泉題



世の毒薬といふ石炭酸も希列刺豫防の必要を人の厭ひの

禍害も三年赤りふる壁の鼠穴より入る梅が香然と何ぞ物事ハ

其時々と用法のりて強ち只一方の定め難しといふ理屈も

水編へ例の恨めし怪談を現世にも亦是時の方便

はく彼櫻欄帯の腰と技己が腫小逐う如き物の道理紙

心得玉のぬ子供衆の神経病を治せんが為さう遮莫田之助が足

切断させし名醫へボシ氏もぬ平凡記者が素より届るぬ筆の

配劑其功能の薄くも何んが只親公達を側々噛むお舎の程を願ふ

日之四上



ついでちとあひ小静が勃と起すやまじき

あつたはなりの第巻で 乙巳の年

をまきえいふとと多うてあつたまお又近々

掛合小巻の寸道は 縁起の一年獲ぬ

志き着きえい入るるえいれいれいれい

の技授のそめて也も 内小巻をひ

あまの子と念と押さ生血相のたさぬ

相 船せ田之助の 縁起者

箱をい替へしあひいれいれいれい

岩者の 相成者

扱てまきえいれいれいれいれい

と和れ

眼尻血とをまき彼方と肥んで実立ると

と和れ

つるより早く着の方へ延きえいれい

と和れ

お室へ第巻と書と押さと実のけ

と和れ

格のひめうんととるせつれいれいれい

と和れ

まご向ふの技授も別格

と和れ

せぬのれ落立とて却て

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ

あつたまきと書と押さと

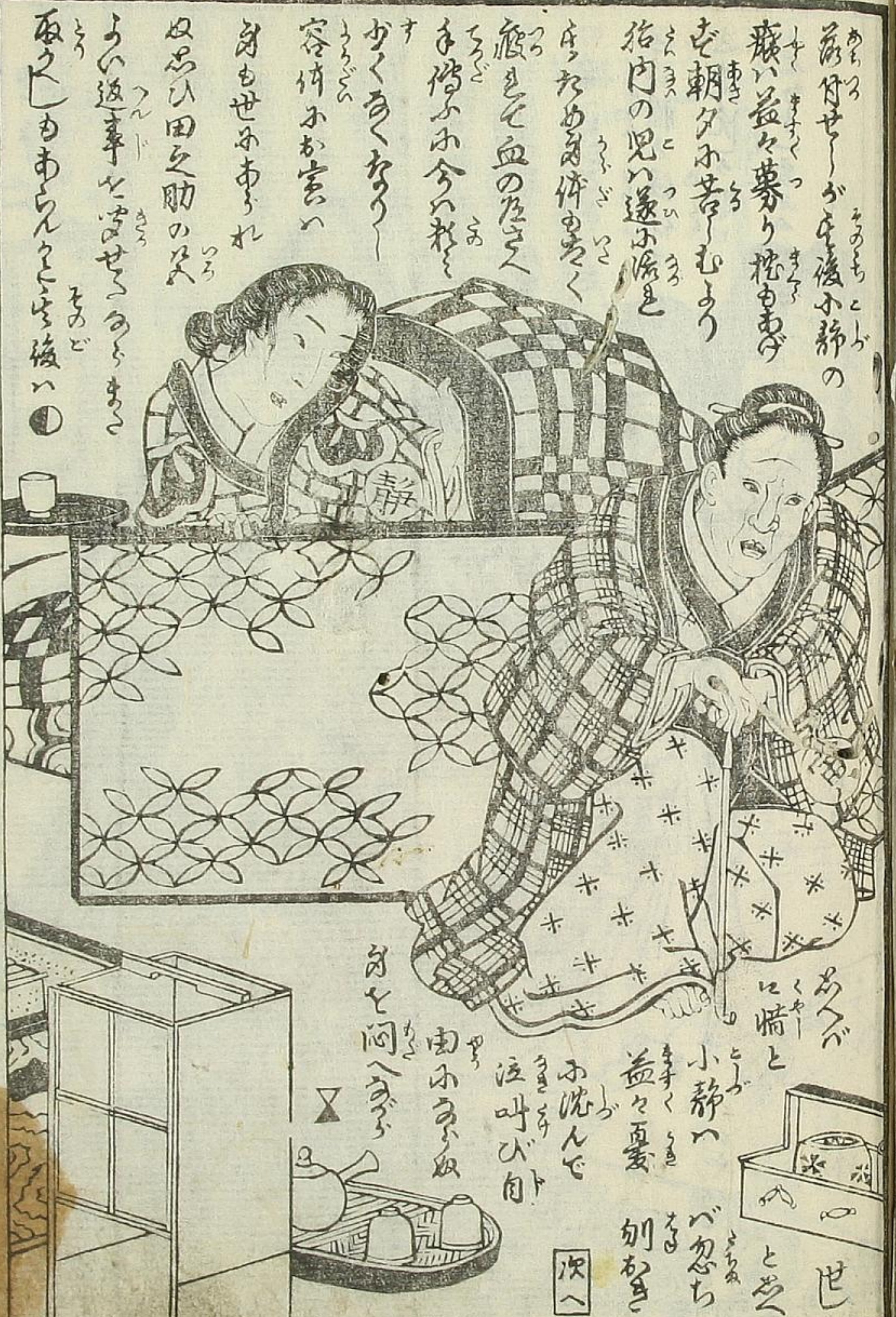
と和れ

あつたまきと書と押さと

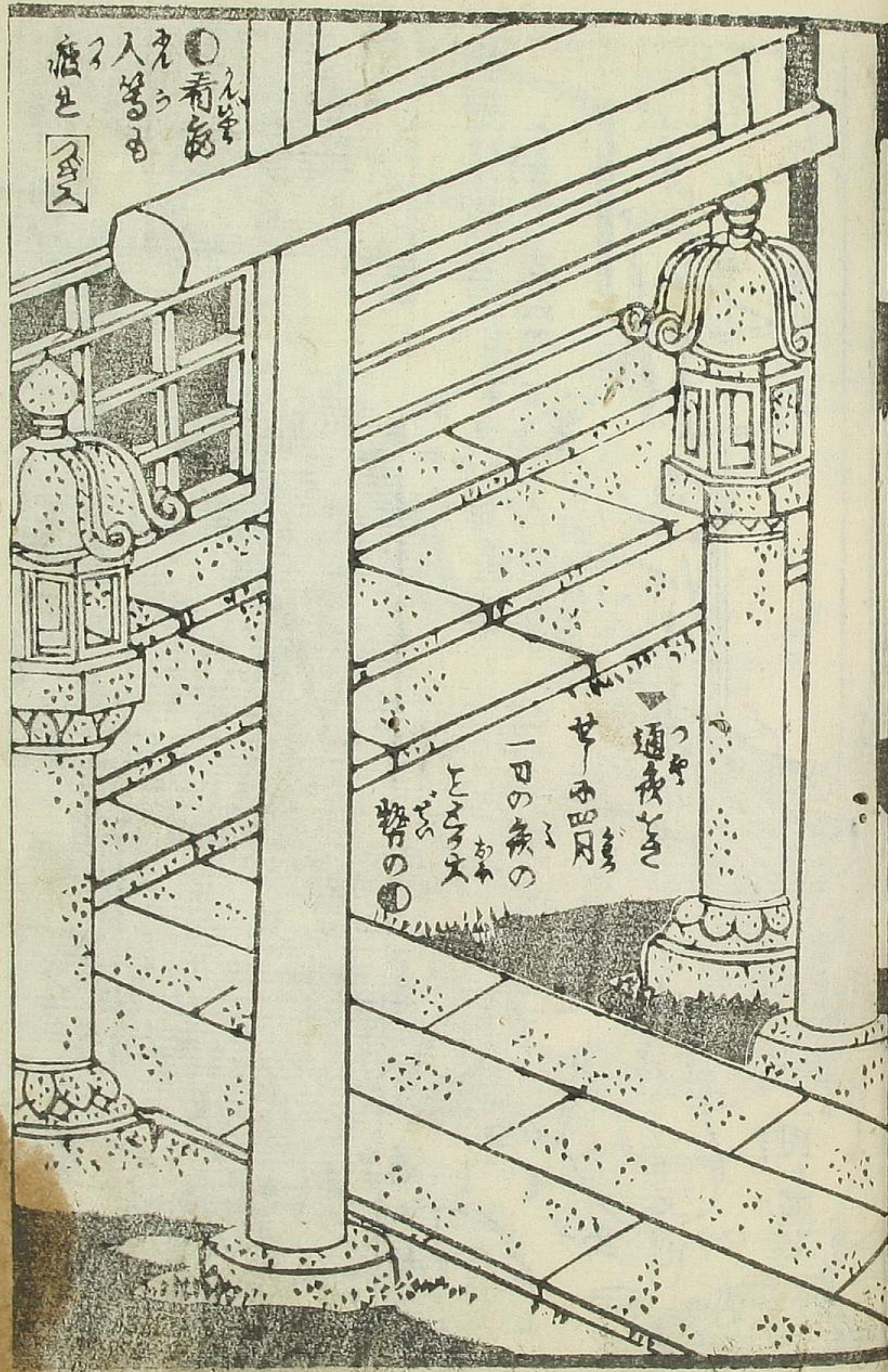
と和れ

あつたまきと書と押さと

と和れ



日記四十一



看病
入等由
酒也

通夜
廿四日
一日の夜の
警の



徹夜
徹夜放自
ひんが
まに人々も死して
手とさせと
おの出あり
と發
毎夜四五人づ
めのと



△ 雨あふねと婦士のあひだり

入々由申事と傳じ

後同ト扱ふる

出市以去もある

そそ目つと近

あのみ

△ 雨期とあり

はひあつたを

うらた

あふねのあひ

大きに力と傳て

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ



△ 折もどろ

日初麻とて

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

△ 雨の七日

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ

あふねのあひ



つぎ
使り小遊とと寄き
本あるとたさる
しりも撞出す
種小耳と傾け
中巻

島田一郎梅雨日記

芳川春涛園 三冊 節入り
岡本起泉 五編 よし切

其名高橋 毒婦小傳 東京奇聞

同 七編 よし切

白菅阿繁顛末

同 三編 よし切

坂東彦三倭一流

同 三編 よし切

澤村田之助曙草紙

同 五編 よし切

御所櫻梅松録

鶴亭香賀作 二冊 袋入
十五編 出板

龜 地本問屋

島鮮堂 網 龜吉

浅草瓦町十二番地



鳥飼音作



ついでに中をまき

日向へ由小静の
横に如くおれ
那通う方まさん
の若くもまやも
やと考うると不
可成りか
かいついす化

おもひのついでに
杖や守りまを故小静
ておるおれとまこと
いふ小静さんや上親の
婿さんよまよと深のまに
えよるおの

おのついでに
押して
あつう今と
何者
初め



夕陽を浴びて尻尾のつかり側を
情の掃小静猫を打ちわしと生
息をとりおれよまや
所のまよあ入か

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに



おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに

おのついでに
おのついでに
おのついでに
おのついでに



事うとゆきふに八が
花津林田川
の辺不怪
以長病也
形ひちく
困窮世
坊合小疎
と女房

子寄の金
中十
昔せよ
病を由全
快はてる由
本所横綱一引

おろ
の

待き一甲海天小入りの五



中不役
け一糸
古とよ

手内十葉の
一子とまひひは
うら上飛軟正院の位
徹の通うかやと糸糸
天向く百五の巻一きと
てそ衣類とと様あはも
さあけあの一廉の英少年ありと類
とほ小姓ふれとぬまううへけ方由存ひと
並み承引して小姓に老いせーが即ち被の
山松糸くぬめて仁八はそ以芳い皮

艘の漁船と所持を

抱へらと一あれはうらに八も
親正院小周ふるれと夜前
窮と救つ色一慮のあるめと
人の落目とるそい船取に



遠れ
 て撤お
 零落
 せし涙分を
 書き種と
 呉兒を
 加へるに
 上の羽の
 茶湯を海
 おて入と
 恨身手再び
 一寺の伝蔵も
 まらねよのよ

日之口

せんやん
 美如のつぎ
 綴りよはま
 うまは家ある
 始めて親子の
 日未まらぬ
 父が老小幼
 せし第一
 清さんおま
 ておとし
 何ぞ因ん
 清さんおま
 名りしう



色看
 遇されぬ
 気象
 也若指
 書おえ
 て引取
 来しゆを
 清急が

清急も海
 情せうの
 茶もまが
 へるを清
 本出紋
 山仁公智
 織の道守
 ありと
 て速い
 色約
 光と海

揚州周延重



四編下





甲子 家にお積りせりや
 世帯の板敷の
 下の方
 田之助
 田之助

田之助



田の物
 田の物

あまの
 ほ乃

下の巻

綱島さん



きありが次
 弟小痛が
 暮のま
 早の甲正番く
 軽上り歩ゆも
 けり名柄ふるじ
 あり出入の機
 ちれちれ
 小治腰を
 由返をみ
 変の
 せも
 八



あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

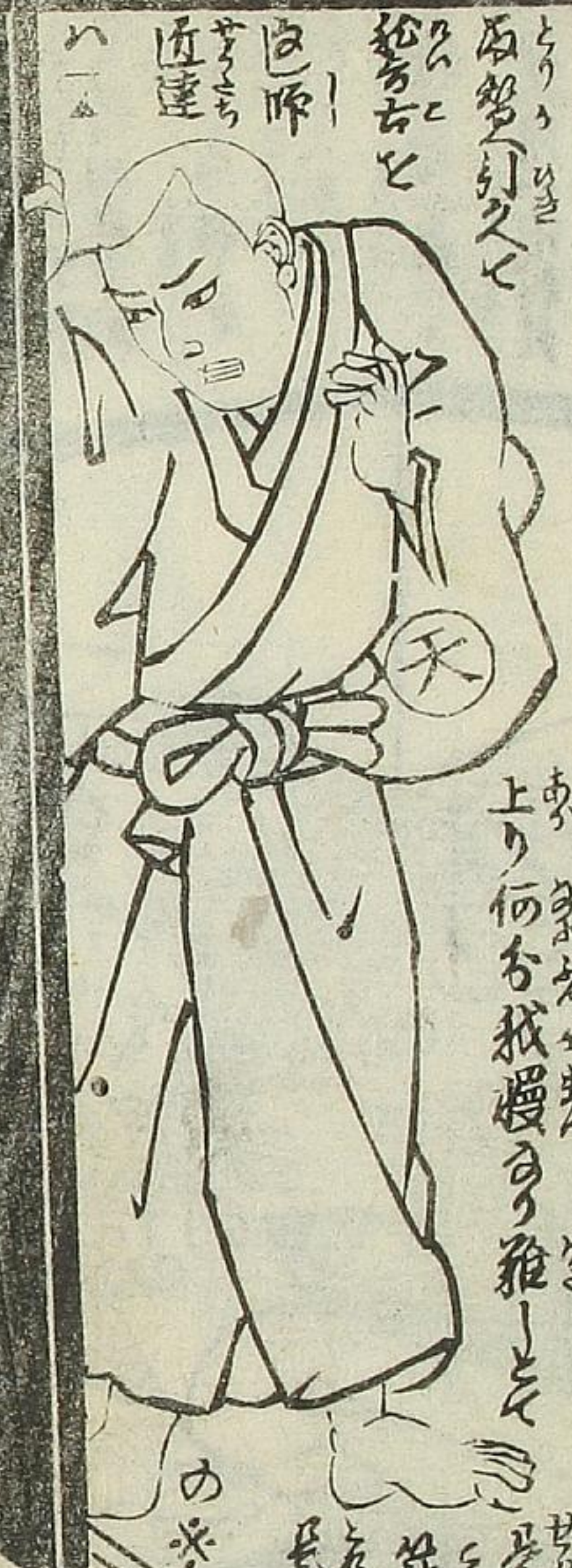
あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

あつと
 月十七日の
 後引地
 賑き
 痛む
 一日も
 傷の
 上

つぎの熱線録よりびと二曲と
 又由受の悩と忍多う既小又受の上を種
 上り何ち我慢のう雅と



近頃
 近頃

の*



引渡り

の

の

の

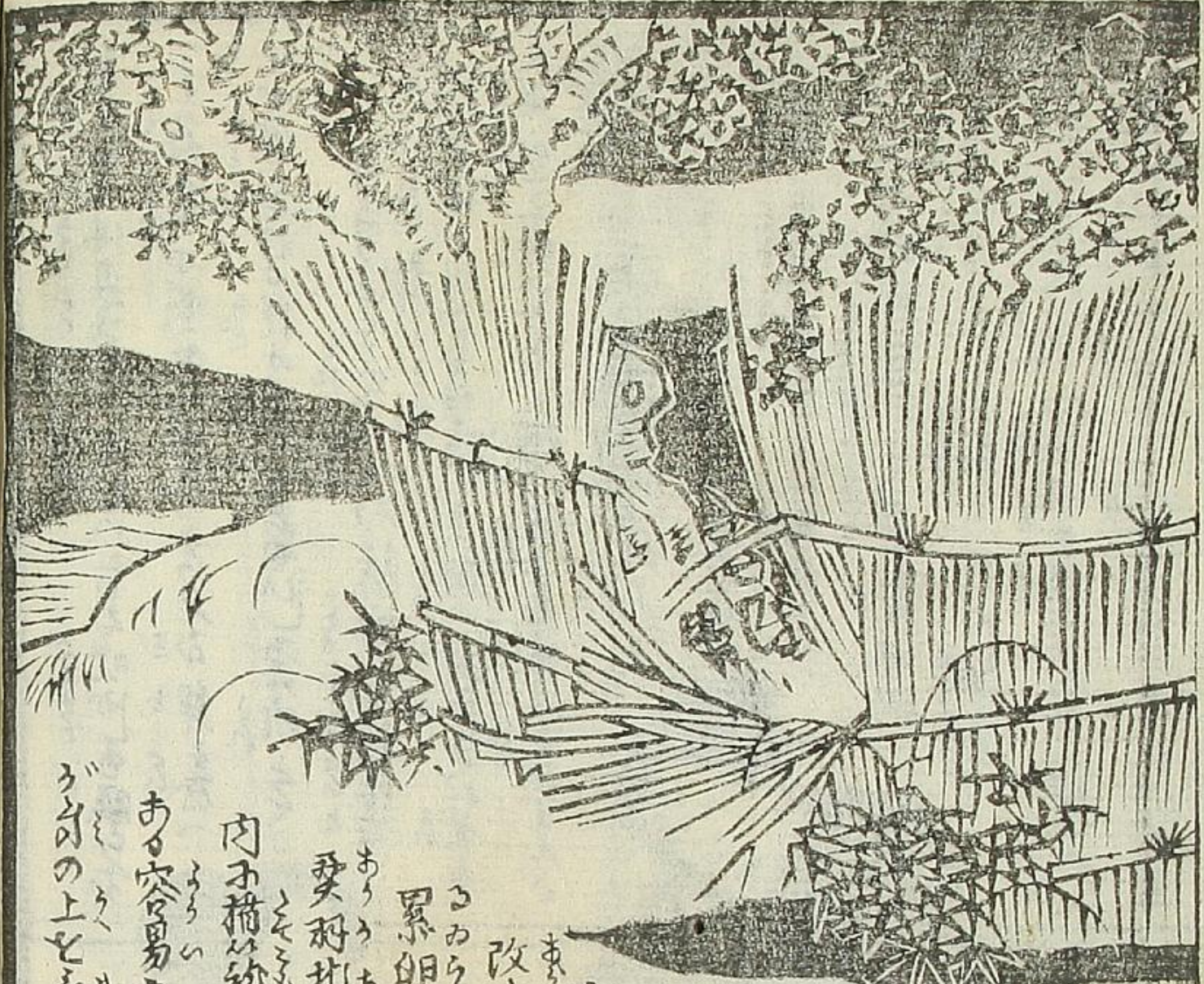
の

の

△子よく体多き色不自の二曲と
 一生幾命不測の四田の二曲と
 出て酒へらねる程の二曲と
 又由受の悩と忍多う既小又受の上を種
 上り何ち我慢のう雅と



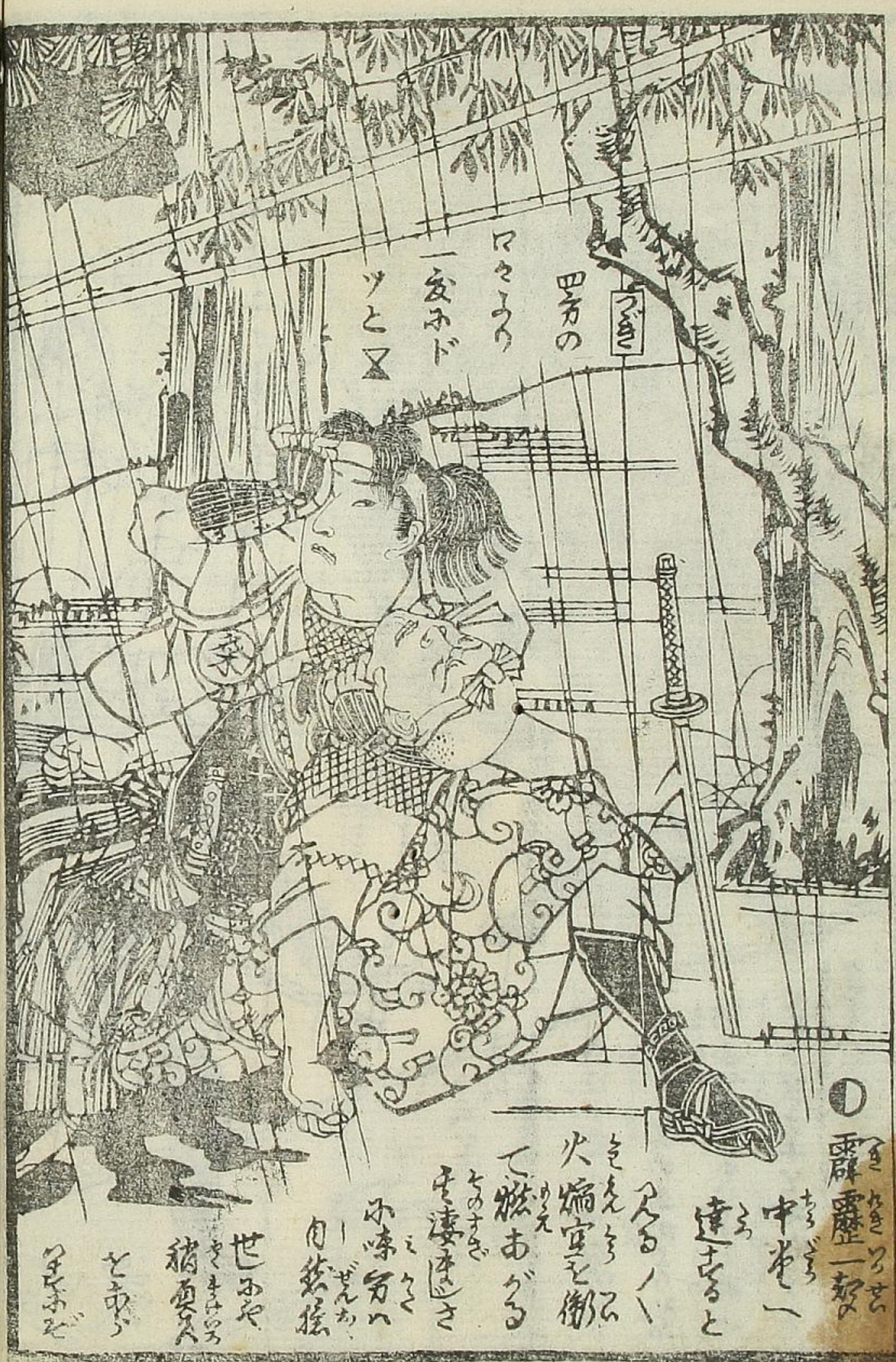
○後進うみ
 再い妻の存
 実の子の如く



又ス茶之巫と上野と海産と云々せと
 天山が岨と海と拒むの事人由所家小
 澤と云々事と優けて戻らぬおれも
 おりんと其の過き月日あり定か買とあり
 先陣のじと云々意と事の言とあり
 世上何とも強き市中松と云々し一脈
 とはぬの二羽の強丸と共小年定の流を
 改め多官軍買小向ありて徳川家のた
 累卵の如くありより旗十恩顧の士輩のす
 愛村地方へ提して我を揚心と持る者あり又上野
 内小橋の細り影と持て度年と退送と云々止の者
 ある容易なる形勢ありと云々徳川仁八と野
 かのの上と云々一まづ宅へ戻るがよいと細め



各々之巫天山と其の着て時と武術と後小立河
 と云々あれと云々影義隊の群小入り
 盟約と云々結ぶと云々いふれと云々
 細と優けてぬせ
 内小ねらぬねらぬ徳川様のおめと
 らが徳川かの徳川と云々西宮と云々も
 云々内野と云々天降と云々
 くれと云々内野と云々徳川と云々
 おれと云々徳川と云々徳川と云々
 各々之巫対面と云々二寸と云々一



田方の
マツヨリ
一交ホド
ツと△

霹靂一撃
中巻一

火焔を衝
て燃あがる

自燃松

世あや
猶負人

とあや
の長あや



△攻ふ事と
兼て船へるものこと
新隊の面々の外遊み
立持柄く小進と奮闘
実戦能力を以て勝る

敵中
小糸の逆も後

此の厚と敵の
ふさず門戸切と

かて敵と拵が本と
せん交と敵をち

敵の打出は破引丸が
門の首(疾)

初め
一人支
あや冷
あはすい
紀軍小隊の
坊をひきまひ

安玉の程も思
来はと糸の逆
へ交り軽傷と
事とせせび

煙りの下ヤ
海りぬけ清水



ついでに教せんといふ所は教せんといふ
 教ふ所一柄の由味が長く延
 ついでに其力を極一
 漸々教と透たしホウと
 一息ついでに武運
 尚不け上の宮換の
 乃と葉あ
 日光で辨揚
 せんといひ
 小徳ふ
 兼といふ
 小徳とあ
 宮物ふといふ

初出 浅草區五町十二番地

綱島之龜吉

島田一郎梅雨日記

芳川春濤園 三冊 袋入り
岡本起泉綴 五編 よと切

其名高橋 其母婦小傳 東京奇聞 同

同 七編 よと切

白 菅阿般系顛末 同

同 三編 よと切

坂東彦三倭一流 同

同 三編 よと切

澤村田之助曙草紙 同

同 五編 よと切

御所櫻梅松録 鶴亭秀賀作

二冊 袋入り 十五編 戸出板

亀 地本問屋 島鮮堂 網嶋亀吉

010190517123

沢村園之知親

五冊之内

